

# トラークル研究

第三号

2006年10月

トラークル協会

〒271-8587 千葉県松戸市栄町西 2-870-1 日本大学松戸歯学部独語研究室気付

Tel/Fax 047-360-9308

## トラークルの詩「プザルム」(第2稿)の "Heidekrug" について

伊藤 卓立

### (I)

トラークルは 1912 年 10 月 1 日に発行された『ブレンナー』にカール・クラウスに献げた詩「プザルム」の第二稿を発表した。この詩は、「言葉の点に於いて(アンマー訳の)ランボーの影響を強く受けている」<sup>1)</sup>、と言う研究者もいれば、「旧約聖書の預言者の嘆きと共にランボーの詩句をも思い出させる」<sup>2)</sup>、という研究者もいれば、「トラークルの抒情詩の外面的言語形式」のみに限ってランボーの「純粹詩の技法(poésie pure-Technik)の決定的な影響」を認める<sup>3)</sup>、という研究者もいる。いずれにせよ、詩「プザルム」は、ランボーの影響と関連させられて、しばしば問題にされる詩である<sup>4)</sup>。それだけに限らず、詩「プザルム」は、トラークルの詩形式の展開から、或いは、詩の内容からもしばしば問題にされる詩である。たとえば、1978 年 3 月 1 日と 2 日にロンドン大学のベッドフォード校で行われた「トラークル・シンポジウム」において、ドップラーは、「1912 年末からトラークルは・・・自分自身の有り様と時代を支配している道徳に立ち向かい始めるが、・・・この観点においてトラークルの詩プザルムは読まれるべきである」、と語っている<sup>5)</sup>。このように重要な詩「プザルム」においてトラークルは "Heidekrug" という特異な言葉を用いているが、ハインツ・ヴェッツェルの『トラークル・コンコルダンツ』に従えば<sup>6)</sup>、"Heidekrug" はトラークルの全作品中でたった 1 回限りしか使用されていない。しかし、既に引用した研究書を紐解いてみても、"Heidekrug" はドイツ語圏の研究者にとってあまり問題にならないようであるが、日本人の研究者にとっては大いに問題である。なぜならば、"Heidekrug" は一読して日本人には具体的イメージが伴わない言葉であるのにもかかわらず、日本のゲルマニストであるならば揃えておくであろう多くの独和辞書にも、又、手持ちのどの独和辞典にも掲載されていないからである。それ故、"Heidekrug" は、トラークルの詩的世界像の解明にとって重要である詩「プザルム」で使用されているのにもかかわらず、日本のゲルマニストにとって理解しがたい言葉であり、又、誤解・誤訳の可能性さえも潜んでいる言葉である。そこでこの機会に我々は、"Heidekrug" が意味するところを作品内在的に解釈し、トラークルの詩的世界像の解明にささやかな寄与をしたい。

### (II)

詩「プザルム」は全 39 行から成り、全体を引用するには長過ぎるので、ここでは "Heidekrug" が使用されている第一連のみを引用したい。その際に、問題の "Heidekrug" をイタリック体の太字で示しておく。

Es ist ein Licht, das der Wind ausgelöscht hat.  
 Es ist ein **Heidekrug**, den am Nachmittag ein Betrunkener verläßt.  
 Es ist ein Weinberg, verbrannt und schwarz mit Löchern voll Spinnen.  
 Es ist ein Raum, den sie mit Milch getüncht haben.  
 Der Wahnsinnige ist gestorben. Es ist eine Insel der Südsee,  
 Den Sonnengott zu empfangen. Man rührt die Trommeln.  
 Die Männer führen kriegerische Tänze auf.  
 Die Frauen wiegen die Hüften in Schlinggewächsen und Feuerblumen,  
 Wenn das Meer singt. O unser verlorenes Paradies.<sup>7)</sup>

作品内在的に "Heidekrug" を理解するために、第一連の解釈を以下にしておきたい。

- 第1行：冒頭で、人間を導く光明（Licht）が失われたことによって、人間の存在の根底を揺るがす悪しき兆候が世界に出現する事が予感させられる。
- 第2行：酩酊し、理性を喪失した男（ein Betrunkener）が午後、即ち、精神の闇の時の接近を予感させる時刻に、"Heidekrug" を立ち去って行くが、この事は、立ち去ってゆく先において更に悪しき事象の出現を予感させる。
- 第3行：「豊かさや生命の象徴」<sup>8)</sup>である葡萄を栽培する葡萄山は黒く焼けこげ、蜘蛛の巣穴と化しているが、この事は、人間の、生命を育む創造的活動が放棄されている事を感じさせる。この悪しき状況は、詩「輝く秋」<sup>9)</sup>において葡萄が金色に輝き（Mit goldnem Wein）、果樹園が豊に実り（Frucht der Gärten）、農夫が「是で良し」（Es ist gut）、という状況とは正反対である。又、Weinberg は「神聖な教会」<sup>10)</sup>と共に「イエス・キリスト」<sup>11)</sup>、又は、「キリストの血」<sup>12)</sup>も象徴するのであるから、黒く焼けこげ、蜘蛛の巣穴と化した「葡萄山」は救世主イエス・キリストの死とキリスト教の崩壊をも象徴している。従って、キリストの死、キリスト教の崩壊、救済の喪失が詩「プザルム」の背後で大きな機能を果たしている。
- 第4行：そもそも人間が実際に生き、その存在の具体的な痕跡が様々に見いだされるべき部屋は白く塗り替えられているが（mit Milch getüncht）、この事は、この部屋に住んでいた人間がいなくなり、この部屋から生命活動が失われ、この部屋が虚無に満たされている事を感じさせる。
- 第5行：前半において、第四行で予感させられた人間生命活動の喪失が具体化され、「あの狂気の人死んだ」、と明かされる。しかし、この場合「狂気」は否定的意味を超えて理解される必要がある。なぜならば、詩「森の小陰」において言われているように、「穏やかな狂気にもしばしば金色なるもの、真実なるものが姿を現す」<sup>13)</sup>からである。即ち、病んでいる時代であるからこそ、真実を求めれば、

求めるほど、純粋な魂は狂気に陥らざるを得ない。換言すれば、狂気はむしろ狂気の時代においては正常である、といえる。それ故、「あの狂気の人には死んだ」、と言う詩句に我々は、詩「ヘーリアン」において、「あの聖なる兄弟は・・・その狂気の穏やかな弦楽器の調べの中へと沈んでいった」<sup>14)</sup>、と歌われたヘルダーリーンを想起する事もできる。従って、「あの狂気の人には死んだ」、という事によって、まだましな時代、仏教の言葉を借りれば「像法の世」、が終わり、更に悪しき時代、仏教の言葉を借りれば、「末法の世」の始まりが告知されている。

後半において、現在のヨーロッパ世界からは完全に失われてしまった原初的世界が叙述される。即ち、夕闇に満たされたヨーロッパ世界とは完全に隔絶し、太陽が燦々と照る南海の孤島という別世界で、太鼓に合わせて男達は戦闘の踊りを踊り、打ち寄せる漣に合わせて腰蓑をまとった女達は腰を振って踊る。この「神なる自然」と一体化した世界こそ「我々の失われた楽園」である、と詩人は詩「ブザルム」でいっているのである。

以上を纏めれば、詩「ブザルム」の第一連において、キリストの死によって「光明」を失った世界における更に悪しき出来事の出現の予感が詩的に造形化されている。それ故、詩「ブザルム」はいわば一種の「失楽園物語」である。

### (III-1)

ここで "Heidekrung" の解釈に入りたい。そこで先ず、これまでの日本人の研究者の翻訳を年代順に引用し、問題の所在を明らかにしたい。又、入手する事ができた種類の英語訳も、参考のために、掲載しておく。

- 1) 「巨大な酒壺があつて 午さがりに酔っ払いが飲み干していってしまう」(平井俊夫 訳 1967年)
- 2) 「野の居酒屋がある、昼さがり酔っばらいが出てゆく」(ホルムート・栗崎・瀧田共 訳、1967年)
- 3) 「昼さがり 酔客の去ってゆく荒地の居酒屋がある」(畑 健彦訳、1968年)
- 4) 「荒れ野に 居酒屋がある、そこを 昼下り 酔っばらいたちが立ち去っていく」  
(中村 朝子訳「トラークル詩集」、1983年)
- 5) 「野の居酒屋がある、昼さがり酔っばらいが出てゆく」(ホルムート・栗崎・瀧田共 訳、再販、1985年)
- 6) 「荒れ野に 居酒屋がある、そこを 昼下り 酔っばらいたちが立ち去っていく」  
(中村朝子訳「トラークル全集」、1983年)
- 7) 「昼下がり 酔っばらいが出てゆく野の居酒屋がある」(瀧田夏樹訳、1994年)

8) "There is a village pump which a drunk quits in the afternoon" (Alexander Stillmark, 2005)

ドイツ語の "Heidekrug" は、平井訳では「巨大な酒壺」と訳出され、ホルムート・栗崎・瀧田共訳の初版と再版では共に「野の居酒屋」と訳出され、瀧田単独訳でも「野の居酒屋」と訳出され、畑訳では「荒地の居酒屋」と訳出され、中村訳では「詩集」と「全集」では共に「荒れ野(に) 居酒屋(がある)」と訳出され、スティルマークの英語訳では "a village pump" と訳出されているが、これらの翻訳を概観すると、"Heidekrug" がグリムの『ドイツ語辞典』を筆頭に多くの辞書に掲載されていないのこともあって、翻訳者達は "Heidekrug" を "Heide" と "Krug" に分解して解釈している。

(III-2)

そこで我々もまずは、"Heidekrug" を "Heide" と "Krug" に分解して論考を進めてゆきたい。

(III-2-1)

まず、"Heide" の日本語訳の意味を国語辞書を繙いて確認したい。

「<sup>あれち</sup>荒地」は『日本国語大辞典』(小学館)では、「①水害や山崩れなどの災害によってそこなわれ、耕作できなくなったままうち捨ててある田畑。②田畑、宅地、池沼、山林、牧場その他、地租を納める土地が、天災によって地形を変えたもの。③田畑や宅地などにしないで、そのままにしてある土地」、と説明されている。

「荒れ野」は同辞典では、「荒れた野。耕作されていない未墾の野。あらの」、と説明されている。

「野」は同辞典では、「①平らな地。山に対するもの。②荒野。里に対するもの。放置されて草や低木などの茂ったままになっている地」、と説明されている。

又、英語訳の "a village pump" は OED (volume XIX, p. 633) では "a village's communal water pump" と説明されている。

ここで問題点をまとめれば、次のようになる。

- 1) 「田畑や宅地などにしないで、そのままにしてある土地」を意味する「荒地」(畑訳)が適切なのか。
- 2) 「耕作されていない未墾の野」を意味する「荒れ野」(中村訳)が適切なのか。
- 3) 「放置されて草や低木などの茂ったままになっている地」を意味する「野」(ホルムート・栗崎・瀧田共訳と瀧田個人訳)が適切なのか。
- 4) "Heide" を訳出したとは考える事ができない「巨大な」(平井訳)が適切なのか。
- 5) 平井訳と同様に全く別な事を意味するスティルマークの英語訳 "village" が適切なのか。
- 6) 上記以外の別な解釈が必要なのか。

これらの問題を解決するために、現代の一般的なドイツ語辞書を繙き、"Heide" の意味を確認したい。

- 1) Gebiet einer überwiegend baumlosen, flachen Landschaft [mit sandigen Boden], der hauptsächlich mit Heidekraut und Wacholder bewachsen ist. (Duden. Das große Wörterbuch der deutschen Sprache. 1977.)
- 2) un bebauter, ebener Landschaft, der mit rotlilablühenden Zwergsträuchern, Wacholder, Gräsern und Kräutern bewachsen ist. (Klappenbach / Steinitz: Wörterbuch der deutschen Gegenwartssprache. 1977.)
- 3) flache, baumlose, sandige, mit Gräsern und kleinen Sträuchern, besonders Heidekrautgewächsen, Ginster, Wacholder, bewachsene Landschafts- und Vegetationsform. (Brockhaus-Wahrig. 1981)

これらの説明に従えば、"Heide" は「ほとんど木が生えていず、ヒース等の低木や雑草が生えているだけの、耕作されていない平坦な（砂）地」である、と規定することができよう。この規定に鑑みれば、「放置されて草や低木などの茂ったままになっている地」を意味する「野」という日本語訳（ホルムート・栗崎・瀧田共訳、及び、瀧田個人訳）が、暫定的ではあるが、最適であるように思える。他方、「巨大な」という平井訳と "village" というステイルマークの英語訳は誤解・誤訳であると、断定せざるをえない。

### (III-2-2)

次に "Krug" の日本語訳の意味を国語辞書を繙いて確認しておきたい。

この場合、平井以外の日本語訳は総べて「居酒屋」と訳出しているのので、"Heide" の場合と同様に、平井訳の「酒壺」とステイルマーク訳の "pump" が異様である。そこで『日本国語大辞典』を繙いてみると、「酒壺」は、「酒を入れるつぼ。酒を入れてたくわえておくつぼ」、と説明され、そのほかの説明は掲載されていない。又、英語の辞書を繙くと、"pump" は、"any of various machines that force a liquid or gas into, or draw it out of something, as by suction or pressure"<sup>13)</sup>、と説明され、そのほかの説明は掲載されていない。他方、同国語辞典を繙いてみると、「居酒屋」は、「店先で気楽に酒を飲ませる店。もと、味見に飲ませたものが一杯売りとなり、のち、簡単な料理を提供するようになったもの。居酒屋店、いざけ。いざけや」、とのみ説明されている。従って、「居酒屋」、「酒壺」、「pump」三者は全く別な概念になる。

ここで問題点をまとめれば、次のようになる。

- 1) 六種類の日本語訳で用いられている「居酒屋」が適切なのか。
- 2) 「酒壺」が適切なのか。
- 3) "pump" が適切なのか。

4) 上記以外の別な解釈が必要なのか。

この問題を解決するために、ドイツ語の辞書を繙き、"Krug" の意味を確認したい。

- 1) Eine Bierschenke, ein öffentliches Haus, wo Bier und Branntwein geschenkt wird. (Adelung, 1796)
- 2) Wine Schenke, wo Bier und Branntwein geschenkt wird, ein Wirthshaus. (Campe, 1808)
- 3) niederd., ein Dorf-Wirthshaus, eine Schenke. (Heyse, 1833)
- 4) eine Schenke, vom aushängenden Zeichen des Kruges. (Sanders, 1876)
- 5) wirtshaus. (Grimm, 1873)
- 6) caupona. (Heyne, 1906)
- 7) Krug "Schenke" kommt im Mnd. des 13. Jh. ... auf. Man hat gemeint, der als Wirthshauszeichen ausgehängte Krug habe der Schenke den Namen gegeben. (Trübner, 1939)
- 8) (landisch., bes. nordd.) Wirthshaus, Schenke. (Duden. Das große Wörterbuch der deutschen Sprache. 1977.)
- 9) landisch. bes. norddt. Schenke, Gasthof. (Klappenbach/Steinitz: Wörterbuch der deutschen Gegenwartssprache. 1977.)
- 10) (norddt.) Schenke, Wirtshaus. (Brockhaus-Wahrig. 1981.)

これらの説明に従えば、"Krug" は、北ドイツの方言ではあるが、「居酒屋」を意味するので、「居酒屋」とする畑沢、ホルムート・栗崎・瀧田共訳の初版と再版、瀧田個人訳、「詩集」と「全集」の中村訳が、暫定的ではあるが、適訳であるように見える。他方、「酒壺」とする平井訳と "village" とするスティルマークの英語訳は誤解・誤訳であると、断定せざるをえない。

### (III-3)

以上で、"Heidekrug" を "Heide" と "Krug" に分割した、これまでの日本人の研究者達の解釈は明らかになった。しかし、我々は、詩人が書いたとおりに、分割せずに "Heidekrug" を一語として解明したい。そこで、説明の手順として、トラークルが "Heidekrug" を用いるようになった経緯を先ず明らかにしておきたい。トラークルは 1907 年にインゼル書店から出版されたアンマー訳の "Arthur Rimbaud. Leben und Dichtungen" をかなり高い確率で読んでいた、とバージェルは推定している<sup>16)</sup>。又、最新の『インスブルック版全集』に依ると、"Heidekrug" はアンマー訳の「錯乱 II」の「言葉の錬金術」を参照せよ、と注されている<sup>17)</sup>。そこで、アンマー訳を繙いてみると、"Heidekrug" を含む第三連は次のようにドイツ語に翻訳されている。

Ich war wie in einem Heidekrug.

Ein Sturmwind jagte den Himmel. Am Abend begann

das Wasser des Hains im Sand zu versinken.  
Gottes Wind füllte mit Eis seine Lachen an.  
Weinend sah ich Gold — und konnte nichts mehr trinken. <sup>183</sup>

一読で、全体の雰囲気はトラークルを思い出させるが、詳細は『インスブルック版全集』の注解に任せ、ここで確認しておきたい事は、トラークルがこれを読んで "Heidekrug" を自分の詩「プザルム」に応用した、という事である。

そこで次に、"Heidekrug" の理解のために、ランボーの原詩を確認しておきたい。

Je faisais une louche enseigne d'auberge.  
- Un orage vint chasser le ciel. Au soir  
L'eau des bois se perdait sur les sables vierges,  
Le vent de Dieu jetait des glaçons aux mares ;

Pleurant, je voyais de l'or - et ne pus boire. - <sup>193</sup>

アンマーは、フランス語の "auberge" を "Heidekrug" というドイツ語に翻訳したわけですが、参考までに、日本のランボー研究者がこの "auberge" をどのような日本語に翻訳しているか、という事を概観したい。

- 1) 俺は、剥げちよろけた旅籠屋の看板となった。(小林秀雄訳 1938年、改版1970年)
- 2) おれは宿屋のあやしげな看板になっていた。(高橋彦明訳 1967年)
- 3) おれは、旅籠屋のあやしげな看板になっていた。(金子・斉藤・中村共訳 1970年)
- 4) ぼくは旅籠のいかがわしい看板になっていた(宇佐美 斉訳 1996年)

フランス語の "auberge" は仏和辞書と仏英辞書を繙いて調べると、次のように説明されている。

- 1) (村や町の) 小料理屋兼旅館、はたご屋。白水社仏和大辞典 1981年)
- 2) (田舎の小さな) 料理屋兼旅館、旅籠屋。(小学館ロベール仏和大辞典 1988年)
- 3) (田舎の) 宿屋。(クラウン仏和辞典 1995年)
- 4) inn, tavern; country restaurant. (The Penguin French Dictionary. 1985)

これらの辞書の説明に従えば、「旅籠屋」とする小林訳、「宿屋」とする高橋訳、「旅籠屋」とする金子・斉藤・中村共訳、「旅籠」とする宇佐美訳はいずれもフランス語 "auberge" の直訳



の範囲内であり、問題はない。

(III-4)

以上の、ランボーの日本語訳と辞書の検討の結果に鑑みれば、ドイツ語訳においても「旅籠屋」、「宿屋」、「旅籠」が期待されうる。事実、仏独辞書ではフランス語の "auberge" は "Wirtshaus" である、と説明されている<sup>20)</sup>。しかし、アンマーは "Heidekrug" と訳出したのであるから、我々はここでどうしても "Heidekrug" それ自体を語学的に明らかにしなければならない。そこでできる限りの辞書を繙いたところ、次の二冊の辞書に "Heidekrug" が掲載されていた。

- 1) Heidekrug: im Walde, in der Heide gelegen, Waldkrug (Sanders: Wörterbuch der deutschen Sprache. 1876.)
- 2) Heidekrug: Wirtshaus in einem Dorf in der Heide. (Brockhaus-Wahrig. 1981.)

ブロックハウス・ヴァーリッヒの辞書は、注目すべき事に、現代の新しい辞書であるのにもかかわらず、"Heidekrug" を掲載している唯一の辞書であり、「野中の村の居酒屋」とする説明は直接的で、明快である。ところが、ザンダースの辞書では、"Heidekrug" は "Waldkrug" である、と説明しているので、辞書を繙いて、"Waldkrug" の意味を確認したい。しかし、"Waldkrug" が掲載されている辞書も少なく、次の二冊だけであった。

- 1) Waldkrug: ein im oder am Walde liegender Krug oder Ort, wo Bier und Brantwein geschenkt wird. (Campe: Wörterbuch der deutschen Sprache. 1811.)
- 2) Waldkrug: im walde liegendes gasthaus. (Grimm. 1922.)

ここで、"Heidekrug" に関するザンダースとブロックハウス・ヴァーリッヒの辞書の説明、並びに、"Waldkrug" に関するカンペとグリムの辞書の説明を纏めれば、我々は "Heidekrug" を、「森又は荒野の田舎の居酒屋」、と定義する事ができる。この結果に鑑みれば、アンマーは "Heidekrug" によってフランス語の "auberge" が意味する「(村や町の) 小料理屋兼旅館」、「(田舎の小さな) 料理屋兼旅館」、「(田舎の) 宿屋」、「country restaurant」を、「村の」、「田舎の小さな」、「田舎の」、「country」を十分考慮して、ドイツ語に翻訳した、と考える事ができる。しかし、ドイツ語の "Heidekrug" の "Heide-" の部分は、既に明らかにされたように、「森」と「野」の両方を意味するので、"Heide" の意味をトラークルの作品内から解釈して、確定する事が我々にとって重要である。

そこで、日本語の「荒地」、「荒れ野」、「野」を意味する "Heide" は、ヴェッツェルの『トラークル・ゴンコルダンツ』を繙いてみると、詩「デ・プロフンディス」と遺稿の詩「とある夕べ」において使用されているのみである。

- 1) Nachts fand ich mich auf einer Heide, (De Profundis)
- 2) Die Haide war einsam und unermessen. (Ein Abend)

たった二回のだけの使用では "Heide" はラークルの基本語彙には成りえない、或いは、"Heide" はトラークルの詩的世界像を構成する要素を担う特別重要な言葉ではない、と我々は言わざるをえない。我々は既に、詩「ブザルム」の第一連において、キリストの死、教会の崩壊を背景にして、世界から「光明」が失われ、更に悪しき出来事の出現が予感されている、と解釈したが、「Heidekrug」を「荒地」、「荒れ野」、「野」と解釈して、「荒地の」、「荒れ野の」、「野の」居酒屋を酔っぱらいが午後立ち去る、という場合、一体どのような「更に悪しき出来事の出現が予感させられている」のか。しかし、トラークルは "Heide" を二回しか用いていないのであるから、トラークルの詩の世界からその答えを帰納する事は困難である。

### (III-5)

次に、"Heide" を「森」とする解釈を検討したい。この際に注目したいのは "im oder am Walde liegender Krug" というザンダースの説明で用いられている "Wald" である。なぜならば、"Wald" は、二回しか用いられていない "Heide" とは反対に、『トラークル・コンコルダンツ』に依れば、トラークルによって 139 回も用いられているので、291 回用いられている "Nacht"、225 回用いられている "Schatten"、175 回用いられている "Abend" に次いで、トラークルの詩的世界像を構成する重要な基本語彙である、と考える事ができるからである<sup>21)</sup>。

そこで最後に "Heide" を語学的に更に詳しく調べたい。

- 1) Ein großer mit Tangel- oder schwarzem Holze bewachsener Wald, in welchem Verstande es in Ober- und Niedersachsen häufig ist. (Adelung, 1796.)
- 2) Einen Wald überhaupt. Holz in der Heide fällen. In die Heide fahren, nach Holz. (Campe, 1808.)
- 3) eine mit Nadelholz bewachsene Ebene, ein Nadelholz, landisch überhaupt für Wald, Gehölz. (Heyse, 1833.)
- 4) Doch namentlich bei Schiller auch öfter geradezu für Wald. (Sanders, 1876.)
- 5) heide für wald in den norddeutschen bezirken, ... heide heizet eigentlich ein groszer wilder mit tangel- oder schwarzem holz bewachsener wald. (Grimm, 1877.)
- 6) in Norddeutschland auch = Wald(.) (Heyne, 1906.)
- 7) In der Mark, überhaupt in gewissen Teilen Norddeutschlands, nennt man die Wälder fast durchgängig Heiden(.) (Eberhard, 1910.)
- 8) In Norddeutschland hat Heide sich verengt zur Bezeichnung von großen Kiefernwäldern auf Sandboden(.) Schon im 13. Jh. kommt niederdeutsch Heide allgemein für "Wald" gebraucht

werden(.) (Trübner, 1939.)

これらの多少古い、しかし、ほぼトラークル自身が使用する事ができた辞書の説明に従えば、"Heide" は本来「針葉樹林に覆われた自然の森」を、「森一般」を、シラーの場合はしばしば「森」を、北ドイツの方言ではほとんど一貫して「松が生える森」を意味する。更に、独和辞典を繙いてみると、"Heide" は『相良大独話辞典』（博友社、1958年）と『木村・相良独話辞典』（博友社、1963年）では共に「針葉樹林；（広く：）森（山）林」と説明され、『独和言林』（白水社、1968年）では「（砂地の）針葉樹林」と説明されている。それ故、これらの辞書の説明に従えば、"Heide" を「森一般」と理解して、全く問題はない、という結論に到達する。

(III-6)

このように "Heidekrug" の "Heide" を "Wald" (森) の同意語と解釈すると、"Es ist ein *Heidekrug*, den am Nachmittag ein Betrunkener verläßt" の一行はどのように解釈されなければならないか、という疑問が最後に明らかにされなければならない。

「午後酔っぱらいが立ち去る森の居酒屋がある」、と言っているが、暗くなり始めた「森の居酒屋」を立ち去った「酔っぱらい」は次に何処へ行くのか。詩「闇の中で」の初稿で "Abendspaziergang im Wald" (HKA I, S. 411) といっているように、この「酔っぱらい」も森の中へ行くのである。しかし、詩「プザルム」の第二連の一行で "Die Nymphen haben die goldenen Wälder verlassen" (HKA I, S. 55) といっているように、夕闇の近づいた森は、「この風景の中で一番暗い領域」<sup>22)</sup>、即ち、更に悪しき事象の出現が強く予感される場所である。トラークルが 139 回も使用した "Wald" の全体を分類して把握する事は困難な作業であり、この小論の目的ではないので、ここではその中でも一番悪しき事象を表している、と考える事ができる表現だけに注目したい。詩「闇の中で」の初稿において、

... O der purpurne Mensch.

Ihm aber gleichen Wald, Weiher und weißes Wild.

Kreuz und Kirche im Dorf. In dunklem Gespräch

Erkannten sich Mann und Weib(.) (HKA I; S. 411)

といっているが、「Erkannten sich Mann und Weib」という古風な性交渉を意味する表現が暗示しているように、トラークルにとって究極の悪しき事象とは妹との近親相姦である。詩「パッション」の初稿において「森」の中で行われる近親相姦は次のように詩的に造形化されている。

Zwei Wölfe im finsternen Wald

Mischen wir uns Blut in steinerne Umarmung

Und die Sterne unseres Geschlechts fielen auf uns. (HKA I, S. 393)

この三行から近親相姦の詩的造形化を読み取る事は解説を必要としない。

又、伝記的告白色が強い『啓示と没落』において、「夜の森の中で・・・ヴォーダンのようになった俺は雪のように白い野獣を追いたてた・・・すると妹の銀色に輝く傷口から血が流れ、真っ赤な雨が俺の上に降りかかった」(HKA I, S. 168f.)、といているが、ここに近親相姦によって妹から処女を奪った生々しい体験の告白を読み取る事も難しくない。この場合、「森」は妹との近親相姦が初めて行われ、又、その後も近親相姦が続けられている場所を象徴的に示している。

更に、近親相姦のおぞましき結果としての、現実であろうと或いは杞憂であろうと、墮胎の詩的造形化をトラークルは『ドラマの断片』の初稿において次のように試みている。「水車小屋のそばで今日少年の死体が見つかった・・・」、「狼が俺の最初に生まれた子を引き裂いたのだ」、という会話が「森の傍らの小屋」の中でペーターと小作人との間で交わされるが (HKA I, S. 455)、この場合「森」は近親相姦の結果としての妊娠の処置としての墮胎が行われる場所をも象徴している。それ故、「森」は「死」に満ちている場所でもある。遺稿の「煉獄」はこの事情を次のように詩化されている。

Am Saum des Waldes - es wohnen dort die Schatten der Toten - (HKA S. 398)

更に、我々のコンテキストから読めば、詩「フェーン」の後半五行は、墮胎を終えた母親の姿を表している、とも解釈する事もできる。

Und es schwankt die Klagegestalt

Der Mutter durch den einsamen Wald

Dieser schweigenden Trauer; Nächte,

Erfüllt von Tränen, feurigen Engeln.

Silbern zerschellt an kahler Mauer ein kindlich Gerippe. (HKA S. 121)

#### (IV)

ここで以上の論考を纏めれば、結論として我々は次のように言う事ができる。即ち、トラークルはアンマー訳のランボーから "Heidekrug" を一回だけ詩「プザルム」において借用したが、"Heidekrug" の "Heide" をトラークルは全作品中二回しか使用していないので、「野」、「荒野」、「荒れ野」、としての "Heide" はトラークルの詩的世界像にとって重要な意味を担っていない。

それよりもむしろ我々は、アーデルングからエーベルハルトの辞書の説明に従って、"Heide" をトラークルの詩的世界像に取って重要な基本語彙である "Wald" の同意語と解釈したい。そのように解釈する事によって初めて、醜悪して「森の居酒屋」を立ち去ってゆく事によって、それ以上の悪しき事、即ち、「一番暗い領域」である「森」の中での「欲望の無明の遊戯」(die dunklen / Spiele der Wollust) (HKA I, S.160) である妹との近親相姦<sup>23)</sup>の実行が予感されるのである。それ故、"Heidekrug" は「森の居酒屋」と訳出されるのが最善である。この結論に鑑みれば、"Heidekrug" の日本語訳「荒野の居酒屋」、「荒れ野(の)居酒屋」、「野の居酒屋」は全くの誤解・誤訳とはいえないが、近親相姦という最悪の事象を予感させる事は作品内在的にはできないので、最善の日本語訳ではない。ただし、「巨大な酒壺」と英語訳 "a village pump" は明らかに誤解・誤訳である。

#### 注

- 1) Christa Saas: Georg Trakl. (Metzler) Stuttgart 1974. S. 45.  
次の日本語訳ではランボーの影響が明示されている：  
\* 『対訳 トラークル詩集』(ノルベルト・ホルムート、栗崎了、瀧田夏樹訳) 同学社、1967年、284頁参照。  
\* 『対訳 トラークル詩集』(ノルベルト・ホルムート、栗崎了、瀧田夏樹訳) 同学社、再版1985年、284頁参照。  
\* 『トラークル全詩集』(中村朝子訳) 青土社、1983年、109頁参照。  
\* 『トラークル全集』(中村朝子訳) 青土社、1987年、109頁参照。
- 2) Eduard Lachmann: Kreuz und Abend. Eine Interpretation Georg Trakls. (Müller) Salzburg 1954. S. 135.
- 3) Klaus Simon: Traum und Orpheus. Eine Studie zu Georg Trakls Dichtungen. (Müller) Salzburg 1955. S. 22.
- 4) Vgl. Albert Hellmich: Klang und Erlösung. Das Problem musikalischer Strukturen in der Lyrik Georg Trakls. (Müller) Salzburg 1971. S. 72f.;  
Kathrin Pfisterer-Burger: Zeichen und Sterne. Georg Trakls Evokationen lyrischen Daseins. (Müller) Salzburg 1983. S. 127.
- 5) Alfred Doppler: Der Stilwandel in der Lyrik Georg Trakls. In: Londoner Trakl-Symposion. Hrsg. v. William E. Yuill und Walter Methlagl. (Müller) Salzburg 1982. S. 78.
- 6) Heinz Wetzel: Konkordanz zu den Dichtungen Gerorg Trakls. (Müller) Salzburg 1971. S. 293.
- 7) Georg Trakl: Dichtung und Briefe. Historisch-kritische Ausgabe. Hrsg. Walther Killy und Hans Szklenar. Band I. (Otto Müller) Salzburg 1969. S. 55. (= HKA I)
- 8) Herder Lexikon. Symbol. Hrsg. v. Herder Verlag. 3. Aufl. Freiburg / Basel / Wien 1978. S. 181.
- 9) HKA I: S. 37.
- 10) Herder Lexikon. S. 182.

- 11) Manfred Lurker: Wörterbuch biblischer Bilder und Symbole. Zweite Aufl. (Kösel) München 1978. S. 350.
- 12) Gerd Heinz-Mohr: Lexikon der Symbole. Bilder und Zeichen der christlichen Kunst. 4. Aufl. (Diederich) Düsseldorf / Köln 1976. S. 303.
- 13) HKA I: S. 38
- 14) HKA I: S. 69.
- 15) Webster's New World Dictionary of the American Language, College Edition. (The World Publishing Company) Cleveland and New York 1959. S. 1179.
- 16) Otto Basil: Georg Trakl in Selbstzeugnissen und Bilddokumenten. (Rowohlt) Hamburg 1973. S. 39.
- 17) Georg Trakl: Sämtliche Werke und Briefwechsel, Innsbrucker Ausgabe, historisch-kritische Ausgabe mit Faksmiles der handschriftlichen Texte Trakls. Hrsg. v. Eberhard Saueremann und Hermann Zwerschina. Band II. (Stroemfeld / Roter Stern) Basel 1995. S. 15. (=IBA I)
- 18) Arthur Rimbaud: Leben und Dichtung. Übertragung von K. L. Ammer. Einleitung von Stefan Zweig. Zweite Aufl. (Insel) Leipzig 1921. S. 211. トラークルが読んだのは第1版であるが、入手できたのは第二版である。しかし、Zweite Auflage と書かれているだけで、verbessert 或いは vermehrt 等変更を示す言葉は付いていないので、第二版から引用しても、最善ではないが、問題はないと考える。
- 19) Arthur Rimbaud: Œuvres complètes. Édition établie, présentée et annotée par Antoine Adam. (Éditions Gallimard) Paris 1972. S. 107.
- 20) Langenscheidts Großwörterbuch Französisch. Teil I Französisch-Deutsch. (Langenscheidt) Berlin, München, Zürich 1968. S. 63.
- 21) Heinz Wetzel: S. 813.
- 22) Heinrich Goldmann: Katabasis. Eine tiefenpsychologische Studie zur Symbolik der Dichtungen Georg Trakls. (Müller) Salzburg 1957. S. 191.
- 23) 伊藤卓立: トラークルの詩「滅び」の解釈。[リユンコイス 第35号] 2002年、69-81を参照。

## 2006年度活動報告

1. 5月3日(土)迄春季総会及び研究発表会が雑司が谷社会教育会館において開催される。

総会 (1) 本会の2004年度の決算が承認された。(別掲)

(2) 「トラークル研究」第二号は10月1日発行を目途に編集する。内容は論文の他シンポジウムのレジュメ、「トラークル協会創設十周年に寄せて」等とする。

(3) 本会創設十周年記念事業について

1. 「トラークル研究」第二号を十周年記念号として「トラークル協会創設十年に寄せて」という特集を組み、会員各自からエッセーを募集する。

2. 十周年記念パーティーを開催する。(秋の例会時を予定)

(4) 2005年度秋季例会は、2005年10月9日(土)(午前10時から2時)で開催の予定。会場は京都市の公共施設を利用する。

(5) 本会に編集委員会を設置するため次のように会則を改正する。

第五条(役員) 会長(あるいは代表幹事)、幹事及び査読委員は総会において選出する。

会長(あるいは代表幹事)、幹事及び査読委員の任期は2年とし、再任を妨げない。

<改正箇所> 上記の下線部を編集委員(査読委員を兼ねる)と改正する。

研究発表会

高橋喜郎:『Passion』について

三枝紘一:トラークルの詩における所属性の非呈示(試論)

トラークル協会2004年度決算報告			
自2004年4月1日至2005年3月31日			
収入の部		支出の部	
科目	金額	科目	金額
前年度繰越金	133329	封筒代	734
本年度会費	42000	切手代	7560
		トラークル研究第一号印刷代	17000
		現金書留料・書留用紙	540
		本年度支出合計	25834
		次年度へ繰越	149495
		(内、本年度剰余金	16166)
合計	175329	合計	175329

2. 9月9日（金）2005年度第一回幹事会が開催される。  
秋季例会は諸般の事情のため中止が決定される。秋季例会時に開催予定であった10周年記念パーティーは来春の例会時に延期された。
3. 10月1日（金）「トラークル研究」第二号が発行される。
4. 2月22日（水）2005年度第二回幹事会が開催される。

## 会員消息

新会員 保坂直之 899-4343 鹿児島県霧島市国分野口西 18-11 0995-47-0302  
逝去 西田英樹 （謹んで哀悼の意を表します）  
住所変更 高橋明彦 413-0002 静岡県熱海市伊豆山 989-88 スコーレ熱海 501  
0557-82-1545  
住所表示変更 児玉昭人 729-0413 広島県三原市本郷町南方 6660

## お知らせ

1. 2007年度の春の例会の研究発表者を募集しています。応募者は2007年2月末日までに論題をお知らせ下さい。
2. 「トラークル研究」第四号に論文等を発表されたい方は2007年8月末日までに原稿を送付して下さい。
3. 会費未納の方は御納入のほどよろしくお願い申し上げます。
4. 会員名簿に載せますので、差し支えなければメールアドレスをお知らせ下さい（自宅あるいは職場、両方でも結構です）。

## 編集後記

本号の発行が遅れてしまい申し訳ございませんでした。お詫び申し上げます。

これで会報が8号、研究報が3号となり、機関紙の発行は都合11号となりました。しかし最近発表者がますます限られた方になり、マンネリ化は避けられません。なにとぞ未だ発表されていない方、あるいは最近発表されていない方ふるって発表されることを切にお願い申し上げます。

何でも結構です、ご意見、ご要望を事務局の方へお知らせ下さい。郵便、電話、メール ([saegusa.kouichi@nihon-u.ac.jp](mailto:saegusa.kouichi@nihon-u.ac.jp)) いずれでも結構です。



## トラークル協会会則

1995年 9月 20日制定

2003年 10月 18日改正

2004年 10月 1日改正

2005年 5月 3日改正

第一条（名称）本会はトラークル協会と称する。

第二条（目的）本会はトラークル文学の普及、及びその研究の促進を図ることを目的とする。

第三条（事業）本会は年2回総会・研究発表会を開催する。また年1回研究誌を発行する。その他本会にかなう事業をする。

第四条（会員）本会の会員はトラークル文学及びその時代に関心を有する者とする。

第五条（役員）本会には会長（あるいは代表幹事）をおくことができる。

また若干名の幹事及び編集委員（査読委員を兼ねる）をおく。

会長（あるいは代表幹事）、幹事及び編集委員（査読委員を兼ねる）は総会において選出する。

会長（あるいは代表幹事）、幹事及び編集委員（査読委員を兼ねる）の任期は2年とし、再任を妨げない。

第六条（顧問）本会には顧問をおくことができる。顧問の委嘱は総会で決定する。

第七条（会費）本会の経費は会費、その他の収入をもって支弁し、会費は年額2000円とする。

第八条（決算）本会は毎年度決算をし、総会に報告する。

第九条（改正）本会則の改正は総会の出席者の3分の2以上の賛成を必要とする。

（備考）本協会の事務局所在地を当分のあいだ、日本大学松戸歯学部独語研究室気付とする。